一年保育と二年保育の問題

〈その七〉

海　卓子

私共の幼稚園では昭和二八年度を最後に一二年保育を原則とするようになり、現在では一年保育を取扱って居りません。というわけは、特に私共のところでは、幼稚園で集団生活をしなければいけないと思われるこどもたち―社会的な生活態度の面で特に問題があると思われるこども、或は家屋環境に問題があると思われるこども―を優先的に入園させていますので、一ケ年の保育期間では十分その効果を上げることが出来なかったからです。

ですからこの話も少しふるくなりますが、昭和二六、二七年の記録の中から一年保育児と、二年保育児の特徴をみつけてみましょう。

一、保育年数の差によるこどもの特徴

当時の保育の進め方を簡単に記しますと、第一学期はこどもの社会的な態度と能力について観察指導し、第二学期はこどもの問題点と、その原因と思われる家庭の養育態度との関係を考えて、問題を解消するために保育の方法を工夫すること。併せて遊びや仕事の種類別に能力をつけてゆくことに重点をおきます。第三学期は二学期末までにまだ充分出来ないものを補うということにしていました。

組分けは一応在園期間別に年長児を二組に分け、各々二十数名ずつでした。この位の人数でも個人差があって気の弱いこどもは、気の強い積極的なこどもたちと一緒に居ると引込思案になったり、劣等感をもって活動が不活潑になったりします。これをさけて、指導の徹底をはかるために能力別―社会的態度も含めて―ＡＢＣとの三組に分け、二組を一緒にして、ＡＢ、ＢＣの二グループに分けて、それぞれグループ別に遊んだり、仕事をしたりすることもありました。このようなやり方は一人一人のこどもの性質や能力の見当がついてきてからのことです。

さてこのようにして四月から九月頃までのこどもの様子を次に記しましょう。

身のまわりの始末を自分でするということ。

○　帽子掛、下駄箱、引出しなどの位置は入園後三、四日たてばどんな子供でもわかります。自分のものを始末するということについては、どちらもよく出来、大した差はありません。

○　無用のものの始末について。　責任の所在がはっきりしないために乱雑になりやすいようです。一年保育児には、先生に云われた通りするという生真面目さがあり、二年保育

児には時に要領よく立廻る傾向も見られます。そろそろ片附ける頃になると、何気なく河岸をかえてしらん顔をしているのです。このような時に気がついても〝Aちゃズルイゾ〟云えない弱さを一年保育児は多く持っているようですね。〝あなたたちいくつ？。みんな同じ年でしょう〟とハッパをかけても、二年保育児に一目おくような態度が、ますます彼等を威張らせて二等兵的性格を持たせる温床ともなります。年々これが一番困る問題でした。

場面の理解と行動能力。

○ 自由遊びの時にブランコを交代すること。 二年保育児の場合は特定のこども四人を除いて、大部分自発的に交代します。中には年少組のこどもたちまで先生代りにうまく管理出来るこどもも何人かいます。一年保育児の場合は、友だちや先生に云われてようやく交代するものも数名あり、自分がきまり通りするのが精一杯で他人の世話までするゆとりや統率力は見られません。

特定の四人というのは親も〝家の子は手がかかるから二年お世話になろう〟と問題を自覚して入園させたこどもたちで同列において比較するのは無理なこどもたちです。

更に質的なちがいをいえば、二年保育児は集団であそぶおもしろさがわかっていて、それを打切って片附けたり、交代したりするのには人一培努力を必要とするということです。

これと同じようなことは「人の話をきく」という時にも見られることです。話したいことが一杯ある。しかもそれをおさえて他人の話に耳を傾けなければならないというむづかしさ、一年児が「おとなしい」「あつかいやすい」と云われるのも、〝アアシタイ、コウシタイ〟という欲求が弱く、受身の態度が保育者をしてこのようなほめ言葉を発しさせるのではないでしょうか。

○ 座席争いが起きた時どうするか、 二年保育児は三つ巴の争の場合は無理ですが、二人の間の争の時には、相手の云い分に正当な理由があればこれを認め、わからない時は「ジャンケン」などを使って自分たちで解決をしています。一年保育児では第三者の助言がなければ解決がむずかしいようです。

○ 自分で考えたり、工夫したりするということ。 整列の時、後がつかえたり曲るとか、隣の空いている列に移るとか、絵画、工作などの製作に当って創意を発揮するとか、遊んでいる時に自分たちでルールをつくって発展させてゆくなどのことは、二年保育児の方が勝れているようです。これは智恵づきが早いとか、よく出来るということではなくて、自分で考えるという態度のちがいです。

一年保育児は概して感覚が大人ぽくて、きまりにしばられて型にはまりやすく、小ぎれいにキチンとする事は出来るが、こどもらしいのびのびとした個性的な表現に欠けているということです。これは特に私共の園児の家庭が教育に熱心で大人の干渉が多いことにも関係があるようです。

○ 失敗しても最後までやりとおすということ。 二年保育児はあそびに対する打ちこみ方が強いためか頑張りはきくようです。遊びの持続、失敗してもやりとおすというねばりはあります。けれどこの反面、つまらないことにはついて来ない、―おしゃべりをしたり、フラフラ歩きまわったり―という欠点を持っています。

以上は傾向の一部を記したのにすぎませんが、これらから考えられることは具体的に一年と二年の場合、どのように取扱ったらよいかということでしょう。

二、保育年数とその取扱い方について。

○ 二年保育児の場合　四才児と五才児とではその発達段階がちがうのですから、当然保育の具体的なねらいも取扱い方もちがわなければならないと思います。同じようなやり方を繰返していると〝アア、又アレカ〟というような嫌忌感と、狎れからくるボス的な動きが、小学校の先生に〝幼稚園ズレがしている〟というような批評をさせることにもなりましょう。

「当番」を一つ例にとってみると四才児の一学期は当番は何をしなければならないかという当番と仕事との結びつきを解らせて、椅子のあげおろしの仕方とか、机の持ち方、雑布のかけ方などの要領をのみこませます。

二学期になって当番は仲間のリーダーであるという意識が育てられ、仕事への責任―自分がしないと仲間がこまるという自覚―が加わり、三学期で大体全員がこれを身につけます。

年長組になると仲間のリーダーとして自発的にしなければならない仕事を見つけ―欠席者への心遣いや、落しものの始末、他の組への連絡など―当番同志が自分たちの幼稚園での生活を愉快なものにするために相談をしたり、仕事を分担したりして協力的に行動するようになります。修了前には当番の外に一人のリーダーが出て当番を統卒し、こどもたちが自主的に行動する推進力となるのです。

共用の道具の管理などもグループを決めて交互にさせれば責任の所在もはっきりして、もし使い放しで片附けないこどもたちがあればこの管理グループから文句が出て、片附けさせられ、又管理グループに参加すれば、「出し放しでは困る」ということを身にしみて感じます。このように広く、深く指導が発展すれば、「当番」はいつも新鮮で、安易なおっつけ仕事は出来なくなって所謂、マンネリズムになることはありません。

○ 一年保育児の場合　或る意味では、四、五才児の週程を、一ケ年の間にするわけです。年令が大きいから、四才児より急テンポで変化しますが、やはり二年児に追いつけないというのが正直のところでしょう。従って小人数が二年保育児の中にまざることは、しっくりと仲間にとけこめない心配があり、別組にする時は、二年児との対立が考えられ、出来れば能力別―社会的な態度も含めて―一、二年児を一緒にして二組作り、なるべく個人差からくる組内のひらきを少くして、保育の徹底をはかったらどうかと考えます。

（東京・白金幼稚園）

＊　＊　＊

（16頁よりつづく）　入園前より地域社会との連絡を緊密にすることによって、幼稚園や先生に親近感を持たせる様にする。例えば運動会や学芸会の行事に入園前の子供を招待して一日楽しく遊ばせる。又先生は時々家庭訪問をして話し合いをする。（松江幼稚園）

先生は新入園児に対しては母か姉の様な気安さで接する様にする。（洗足幼稚園）

8　自信を持たせること

独立心や自信を持つ様に励ます。（松本幼稚園）

少しでも進歩した時には、大いに褒めて、連絡帳に書いて、家でも褒めてもらう様にする。（阿部幼稚園）

9　健康に留意すること

母親から本人の健康状態を聞いてよく知っておくこと。（洗足幼稚園）

栄養、睡眠を充分にとり、疲労を防ぐ。と同時に、病気以外は休まない様にして意志の強さを培う。（松本幼稚園）